

ソーセージの民話にみる「所変われば」

ドイツといえば、真つ先に思い浮かぶのがビールとソーセージ。全食肉消費量の半分ぐらいが、ソーセージを中心とする食肉の加工品として消費されている。文字通りの「ブルスト（ソーセージのこと）」王国なのである。

以下の民話も、そんなドイツならではのお国ぶりあふれる一篇だが、題して「三つの願い」——「炉辺ばなし」として、ドイツ人たちのあいだではおなじみのもの。

ドイツのある所に、ハンズとリーゼという若い夫婦が仲良く暮らしていた。が、この二人には一つだけ欠点があつて、それは人間の誰しもが抱く「もつと幸せになりたい」という欲望だつた。

ある日、そんな二人の前に、山の精と名乗る美女が現れ、望むなら三つだけ願い事をかなえて上げるといふ。期限は一週間以内で、あわてずによく考えて願い出るようにといつて立ち去つた。若い二人は大喜びで、夜も眠れぬくらい胸がときめいたが、いざとなると願い事が山ほどあつてなかなか決められない。

が、二、三日後のこと、妻のリーゼが夕食のためのジャガイモを皿に盛りつけていると、なんともいえないにおいが鼻をくすぐり、思わず「ああ、これに焼きソーセージがあつたら」

とつぶやいてしまった。するとたちまち、ジャガイモの上に世にもみごとなソーセージが現れた。それを見て、夫のハンズが「そんなつまらない願い事なんかしやがつて、せつかくの幸運をひとつ取り逃したぞ。いつそ、お前の鼻にでも生えりゃよかつたのだ」

と腹立ちまぎれに口走ると、こんどはリーゼの鼻にソーセージが生え、それがなんと八の字ひげのようにだらりとぶら下がつたのだつた。驚いたのはハンズで事は妻の手違いから生じたこととはいえ、こんなみつともない姿になつては家庭の幸せなどあらばこそ、それこそ祈るような気持ちで「神さま、どうか妻の鼻からソーセージを取つてください」と叫んでしまった。

もちろん、つぎの瞬間、リーゼの鼻のソーセージはぼとりと落ちたが、一人が手にした願い事の成果はソーセージだけ。でも、それが他の国の似たような民話のように、元も子もなくならないところがこの民話の味などころなのである。

